

最近のグループの生産・衛生状況

最近の情勢で最も顕著なのは、繁殖成績が安定し、肥育スペースが間に合わなくなって来ている現象です。繁殖成績というよりは肥育成績が向上すると一般に見られる現象です。すなわち一気に増える子豚に対する受け皿がパンクしそうだということです。救済策として、地域的あるいはグループの農場間で、吸収できるうちは良いですが、最悪の外部流出という道はできるだけ避けたいものです。グループでは育種から餌の質、流通に至るまで同じスタンスで和豚もちぶたを生産している関係で、グループ内で生産された豚を大事にわれわれの豚肉流通システムにのせていきたいというこだわりがあるのです。

一方、毎年10月から11月頃にピークを迎える季節的な生産過剰への心配があり、つまり豚価がどうなるか、あるいは食肉センターの枠確保などが危惧されます。サーコワクチン効果もこのところ明白であり、皆さんの実感通りかなりの仕事をしてきているようです。今後は、今まで以上に肥育スペースの確保(肥育豚舎の確保や新設)、あるいは計画的な生産の実行(懐に合わせた種付けペース)が鍵になってくることでしょう。



もうそろそろ肥育に出たい子豚たち。そろそろ限界か？

生産面での特徴は、グループ全般的に繁殖、肥育成績ともに大きな問題はなく、非常に安定的に推移していることです。母豚がボディコンディションを整えて、健康に分娩を迎えることが出来れば、次は分娩舎での食い込みをいかに増やすか、そのための努力として給餌回数を増やすことがいくつかの農場で取り組まれ、それなりの効果がでていよう。自動給餌器を使用している農場では、5~6回まで給餌回数を増やしてみたところ、今の季節でも一日9kg食べる豚も出てきたよう。無駄になる餌ではありませんので出来るだけしっかり食べさせたいものです。その効果はすぐに次回発情種付けまでの日数や、強い発情の再来に反映されるはずですし、そうすれば産子数や分娩率の向上とともにプラスの影響が出てくることでしょう。さらには、離乳前後に必要な人工乳関連の高価な飼料の節約にも一役買っていることは意外と知られていないことかもしれません。

関心ある疾病状況としては、農場や地域の状況によりますが、季節の変わり目が原因で発生していた肺炎（APP）などが終息してきました。常に3月から4月頃のカーテン換気が難しい時期に一致して、肺炎が出易くなります。依然としてくすぶっている農場もあるようですが、早く回復しないと今度は暑さで増体が進まず、密飼い・出荷停滞を起こしてしまいますので注意が必要です。また他の疾病として注意が必要なのは、少し早いですが突発的な回腸炎があるかもしれません。これもいくつかの農場で散見されますが、急に暑くなったり、蒸れたりと肥育環境の急変によるストレスが助長要因です。サーコワクチンが使われる前は毎夏冬苦労していた農場でも発生がかなり減少している農場もあるようです。そのあたりの明白な因果関係はわかりません。回腸炎の疫学は依然として非常に捉えづらいものがあります。



PRRSも分娩・離乳舎で問題になっている農場は少なく、このことは母豚群の免疫安定化がしっかりと図られている証拠です。離乳舎をでるまでマイコ、PCV2、PRRSなどが陰性であれば、肥育期にたとえ散発的にPRRS感染が起こったとしても、ごく軽度で推移し大きな問題なく育成するのです。

2009年7月 グローバルピッグファーム(株)